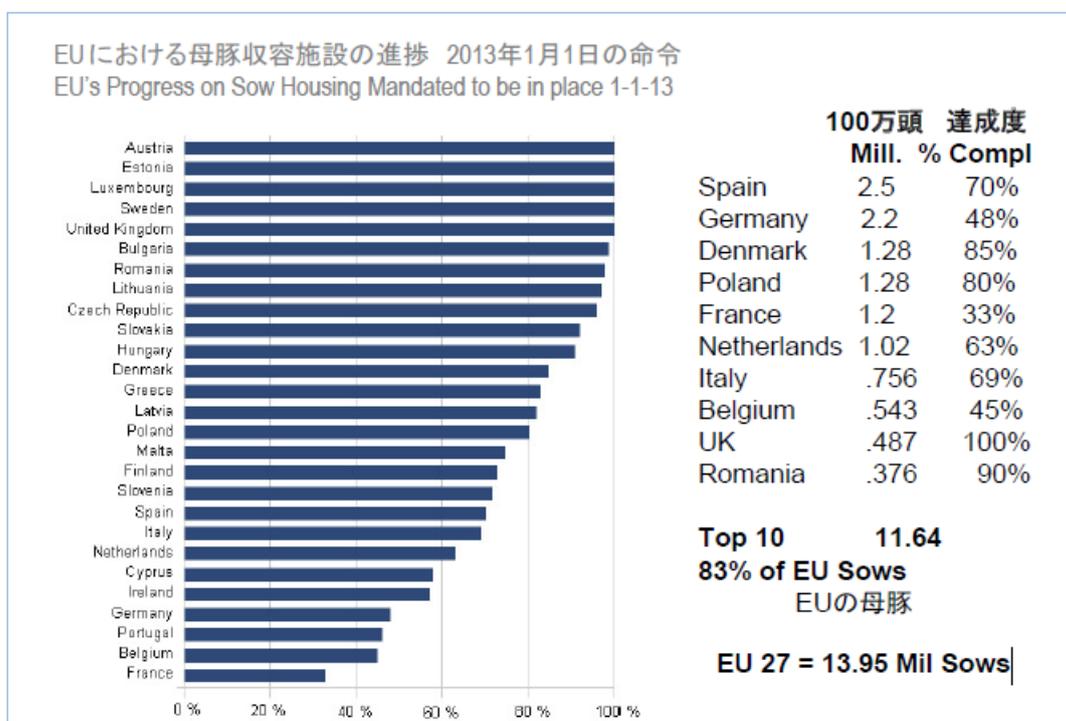


動物愛護が加速するアメリカ養豚の憂い

10年前まではEUで広がっている動物愛護の狂信的な取り組みに対し、高を括っていたアメリカ生産者もいよいよ今度は自分の番かと深刻度を極めています。動物愛護活動家が農場に潜入して、少しでも動物に優しくない行動があれば、すぐに盗撮内容をネットで公開してしまうだけの嫌がらせから、すでに慇懃と力を持った愛護団体は一般社会や政治の世界にも浸透しつつあります。彼らの目的は小売業者やレストラン等、消費者のすぐそばで事業をしている人たちを誘導して、けじめをつけようということです。母豚のストール管理がしゃにむにターゲットになっていて、まったく肉豚生産と関係ないではないかと思われませんが、ある取引によって操作しやすい母豚の管理に白羽の矢が立てられたのです。肉豚を放し飼いにしなければ購入しないとすれば、そもそも成り立たないからです。果たしてグループ管理をすることで動物愛護の宣誓書にサインをした生産者(アメリカの場合ほとんどの肉豚は母豚農場の所有ですから、多少のリスクはあります)だけを容認しようという作戦です。何も知らない食品業者は差別化を求めて自社のサイトにもこれ見よがしに動物愛護の経営方針として公開してきました。しかしながらいかんせん、グループ管理の生産者がまだそれほど多くないため、主産地である中西部から肝心の豚肉の仕入れができなくなってしまうかもしれません。そのため業界団体を巻き込んで、100%可能な期日に落ち着かせたのです。ご存じのバーガーキング(2017年)、マクドナルドや缶詰レトルト食品のキャンベル(食品)、コストコ(大型スーパー)などが2022年までに切り替えるというのがその例です。要するにその時までにはストール管理は禁止して群管理に移行していないと大変なことになるのです。

これは大きな転換であり、多少の生産性の低下があっても関係ありません。できるだけ努力して締め切りまでにグループ管理に移行することがEUとは別の形で進められているのです。生産者として事業の継続を望む以上、その対応をしなければなりません。まだ一握りの大きな食品会社が対象ですが、他のレストランもすぐに追随することでしょう。もう後には戻れません。



EU各国のグループ管理達成度は意外と低く、オランダで63%、デンマークでも85%だ。これはさらにEUの母豚が縮小せざるを得ないことを示唆しており、豚肉供給国としてアメリカも十分戦えるかもしれない

NPPC(全米養豚生産者協会)は第三者の認証機関にて農場の動物愛護度や安全性などを最重要課題に掲げ、生産上の標準管理規範として「PQAプラス」としてバージョンアップしました。これを全生産者に義務化し、それらの費用に出荷豚から拠出した資金の一部を使用することが決められています。

生産現場の選択としては「フリーアクセス」というシステムがにわかには人気を帯びています。それは普段は通常の妊娠ストールのようになっていて、餌の時だけストールに豚が入ると後ろのゲートが閉まって他の豚が入れなくなる仕組みです。また出たくなれば前にあるレバーなどの操作で後ろが開いて豚は自由に広いスペースに出られるというものです。餌の量はすべて同じ量にセットしたレベルしか出ませんが、この方法ですと初期費用もそれほど多くなく、管理はしやすく、生産障害(けんかや怪我)は軽減されるなど生産者には好評だと言われています。早くもスミスフィールドの子会社であるマーフィブラウン農場で2007年に新設された母豚10000頭の繁殖農場に採用されているそうです。ストールをなくして群管理をするということは、妊娠舎が同じであれば極端な減頭を余儀なくされます。したがって隣接地に新たにフリーアクセスシステムを導入した妊娠舎を新設しながら既存舎を改築する方法が最も進めやすい方向性ではないかと思われます。

土地に極度の制約がある我が国の場合にこのような無茶なルールが定着する日は来ないと思っていますが、はたしてどうなることでしょうか。

2013年6月 グローバルピッグファーム(株)